

人格特性に関する他者からのフィードバックが自己概念に与える影響

Effects of the Reference to the Personality upon the Self-image

坂田 真穂

SAKATA Maho

(和歌山県スクールカウンセラー)

竹田 真理子

TAKEDA Mariko

(和歌山大学教育学部心理学教室)

他者による自己の人格特性の評価に対して、たとえそれが自己像として予想していたものと異なっていたとしても、人はその結果に対して「当たっている」と感じるのかを、自己認識欲求の強弱、自己意識（公的自己意識か私的自己意識か）、評価に対する信頼度の高低という要因と併せて検討した。さらに、他者による評価を受けた直後だけでなく一定期間を経た後の自己像への影響についても検討した。

その結果、自己認識欲求の強弱、公的自己意識・私的自己意識、評価信頼度の高低に関わらず、被験者は人格特性のフィードバックを「当たっている」と感じ、更に、自己認識欲求やフィードバックへの信頼度が高い群は低い群に比べ、より「当たっている」と感じていることが分かった。また、もともと持っていた自己像と異なる自己像を他者からフィードバックされた者は、一定期間経た後の自己像がより変化しているということがうかがえた。

キーワード：自己概念 人格特性 自己認識欲求 自己意識 信頼性 フィードバック

はじめに

私たちは、自分の人格特性についてのイメージをそれぞれもっており、血液型占いや星座占いの結果をみては「当たっている」とか「当たっていない」とか言うことがある。より「当たっている」または「当たっていない」という評価をしやすい場合があるとすれば、それはどんなとき、どんな状況なのだろうか。

巷では女性誌などを中心に、妥当性や信頼性が曖昧な心理テストと称するもの（以後、「ココロロジーテスト」とする）が流行しているが、こういった類のものも、自己の人格特性に関する興味や関心から手にすることが多いのではないと思われる。しかし、これら心理テストや占いの結果は、本当にその場限りの興味本位として処理されているのだろうか。

自己の人格特性と向き合う機会は、当然の事ながらこの心理テストや占いだけではない。むしろ、日常の中で身近な人から指摘されたりすることで自分の人格特性と向き合う機会を持つことの方が多いかもしれない。我々は日常の中で何気なく他者を評価し、それを言葉や態度で本人にフィードバックしていることが多いし、また、小さな頃から親や友人や教師にさまざまな評価を受けてきた。評価をした側の人間はすっかり忘れていた安易な一言が、評価をされた側の人間にと

っては忘れられないほど衝撃的であったという話も少なくない。

その評価のフィードバックがマイナスにはたらく場合として、Becker(1964)の唱えたラベリング論がある。いったん非行をただけで周りから「悪」のレッテルを貼られると、本人も悪者という自己像を抱いて、ますます悪に走るようになる。非行・犯罪はこのレッテル貼りがつくるのだという説である。

もし、他者による人格特性のフィードバックが自己概念に影響を与えるのであれば、これらを安易に考えることは出来ないし、特に人格形成期にある子どもに対して、教師や他の評価をする立場にある者が評価を行う際は、かなり慎重に行う必要があるであろう。

本研究では、他者からの自己に関するフィードバックが、後の自分自身の自己概念に何らかの影響を与えるのか否か、与えるのであれば、どういった要因がより影響を受けやすくするのかを明らかにしていきたい。

まず、はじめに受ける影響として、他者から評価された直後の感想である「当たっている」感・「当たっていない」感が考えられる。

浮谷(1994)は、心理検査やその他のテスト結果のフィードバックに対する納得感を「認知的適合感」と呼び、性格検査において、正しい結果をフィードバ

クした群と故意に誤った結果をフィードバックした群では、どちらも80%以上の者がその結果に関して「当たっているほう」と答えた、すなわち、「認知的適合感」を感じたと報告している。これは、故意に誤ったフィードバックをされた者の多くが、実際には存在しない自己の特性を他者に指摘された場合でも、それに黙従する傾向がみられたということである。つまり、少なくとも、他者から人格特性に関するフィードバックを受けた直後は、実際とは異なる人格特性を自分を持っていると思ひこむということであり、さらにこのことは、他者から与えられる言葉や様々なシンボル等を無批判的に受け入れることにより、その人の自己概念や行動などが変容されるといった影響があることを予想させる。

浮谷(1994)の研究は、他者からの人格特性の評価直後の認知的適合感を尋ねるにとどまっており、先行研究においても、長い期間を経た後の、他者から受けた評価に対する認知的適合感を尋ねているものは見当たらない。しかし、他者による評価が我々の自己評価に何らかの影響を与えているとすれば、直後だけでなくむしろ長期的な意味での影響の有無について検討する必要があると思われる。

したがって、本研究では、もともともっていた自己像と異なるフィードバックを受けたとしても、ほとんどの者がその結果に対して認知的適合感を感じているのかを確認するとともに、それが直後の認知的適合感だけでなく、一定期間経過後の自己像にいかなる影響を与えているのかを検討する。

フィードバックされる結果に対する受け手の態度について、菊池・青木(1994)は、占いに対する肯定的な興味・関心が強い者ほど、その評価内容を信じやすいことを指摘しており、このことは性格検査等のフィードバックに対しても同様のことがいえるのではないかと考えられる。したがって、結果への関心が強く、評価の正しさを信じている者ほど、フィードバックされたものを受け入れやすい、すなわち、他者によってフィードバックされた自己への評価に認知的適合感を感じやすいのではないかと、との予測がたてられる。

さらに、自己の特性について他者から提示される情報に対する態度やとらえ方には、個人差があると考えられる。すなわち、同じ状況でもその指摘を受け入れやすい人とその指摘を拒絶しやすい人がいると思われるのである。この個人差を性格特性という側面から検討した研究も少なくない。

例えば、上瀬(1991)は心理テストの受け手の中に、他者の提示した情報を無批判に取り入れるものが多いことを指摘し、これらの「自分がすべきことや進む方向を他者に決めてもらおうとする」傾向を「決定依存」と呼んだ上で、自己を知りたいという欲求である「自己認識欲求」と結びつけて論じている。上瀬(1995)は、

「自己認識欲求」と「決定依存」の2特性が自己情報収集行動を促す要因であると考え、この「自己認識欲求」や「決定依存」が高ければ高いほど、自己に関する情報を収集する行動をとりやすいと報告している。

また、岡田(1995)は自己評価の際、自分自身に注意を向けやすい性格傾向である自己意識特性として、他者の目に映る自分自身に注意が向きやすい「公的自己意識」と自分自身の内面に注意の向きやすい「私的自己意識」をあげている。

高田(1993)は自己理解の二つの方法として、自律的で独立している「独立的自己意識」と他者と結びついている「相互依存的自己意識」を挙げ、相互依存的自己理解が優勢な者ほど社会的比較を通じて自己をとらえようとする傾向があることを明らかにしている。

これら、上瀬(1995)・岡田(1995)・高田(1993)の研究から、自己に関する決定を他者に任せたり、他者の目を通して自己評価を行おうとする性格特性を持つ者があるということが考えられ、それらの性格特性を持つ者は他者の視点を自己評価の最重要ポイントにしていることから、他者からのフィードバックに比較的抵抗を感じず、むしろそれに従おうとする傾向がみられるのではないかと考えられる。

また上瀬(1995)の研究から、自己を知りたいという欲求である「自己認識欲求」が高ければ高いほど、自己情報を収集したい欲求が強いため、他者からの自己情報にも強い関心を示し、他者による自己への言及を比較的受け入れやすいのではないかと予想される。これまで述べてきたことから、他者による評価に対する認知的適合感の高低をもたらずものとして、自己認識欲求の強弱、公的自己意識の強弱、評価への信頼度の高低が考えられる。

本研究では、自己像と異なるフィードバックを他者から得た際も認知的適合感を感じるか否かを検討し、他者によるフィードバックに対して認知的適合感をより感じやすい要因を明らかにする。

また、他者による自己の特性に対するフィードバックが後の自己像に与える影響について、自己認知欲求の高低、公的自己意識の高低、評価に対する信頼度の高低に、評価に対する記憶度という要因を加えて検討する。

— 研究 I —

人格特性に関して、自己像と一致した評価を他者から受けた場合だけでなく、自己像と異なる評価を他者から受けた場合も、そのフィードバックに対して認知的適合感を感じるのだろうか。本研究では、もともともっていた自己像と一致した評価を受けた場合と異なっていた場合という2つの視点から検討する。

また、もし認知的適合感を感じやすい者とそうでな

い者がいるとすれば、認知的適合感を感じやすい者とそうでない者では、どういった点で違うのか、自己認識欲求、公的・私的自己意識、評価の信頼度という点から以下の仮説を検討する。

仮説1：自己認識欲求の強い者は弱い者に比べ、他者による自己の人格特性に対する評価に、より認知的適合感を感じるだろう

仮説2：公的自己意識の強い者は私的自己意識の強い者に比べ、他者による自己の人格特性に対する評価に、より認知的適合感を感じるだろう

仮説3：評価の信頼度が高いほど他者による自己の人格特性に対する評価に、より認知的適合感を感じるだろう

方法

被験者：和歌山大学学生 117名(男子62名・女子55名)

手続き：

I. 1998年5月の第1週から第2週

質問紙①②④及び性格検査③を下記の順に集団で実施した。

- ①「現実自己認知尺度」
- ②「相互依存－独立的自己理解尺度（菅原, 1984）」
- ③「YG性格検査（またはYG性格検査をタイプ直したもの）」
- ④「自己認識欲求尺度」

①「現実自己認知尺度」は、③の「YG性格検査」で測定できる12特性それぞれについて、「自分の性格にどの程度あてはまるかを5段階で評定させた。ちなみに、YG性格検査で測定することのできる特性をもとにしたフィードバック12項目はそれぞれ次の通りである。

- 項目1：抑鬱的である
- 項目2：気分の変化が激しい
- 項目3：劣等感が強い
- 項目4：神経質である
- 項目5：客観的である
- 項目6：協調性がある
- 項目7：攻撃的である
- 項目8：活動的である
- 項目9：のんきである
- 項目10：思考が内向的である
- 項目11：支配的である
- 項目12：社会的に内向的である

②「相互依存－独立的自己理解尺度（菅原, 1984）」は、「次の事柄が自分にはどの程度あてはまるか、『かなりあてはまる』～『全くあてはまらない』の適するところに○をつけて下さい。」という指示のもと、7段階で評定させた。

③「YG性格検査」は、日本心理テスト研究所発行のYG性格検査用紙を用いて通常どおり実施した

群(62名)と、YG性格検査の質問項目をそのままワープロで打ち直して製作した、偽YG性格検査用紙を用いて実施した群(55名)をもうけた。これは、これから受ける性格検査を信頼度の高いテストであると思わせてテストを受けさせる群と信頼度のあまり高くないテストであると思わせてテストを受けさせる群を設けて、仮説3の「評価が信頼度の高いものであるほど認知的適合感が高いだろう」という説を検討するためである。したがって、YG性格検査用紙を用いて通常どおり行った群には、「いまから受けていただく性格検査はYG性格検査と違って、とても有名で、広く使用されている性格検査です。」という指示を行った後、回答させた。一方、偽YG性格検査用紙を用いて行った群には、「いまから受けていただく性格検査は、先日私が作った試行段階にあるものです。」という指示を行った後、回答させた。ただし、内容やテストの採点・評価に至るまで、紙面と指示以外は同じ条件で行い、双方とも実際のYG性格テストを用いた。

④「自己認識欲求尺度」は、「性格検査の結果の報告を希望しますか？あてはまる場所に○をつけておいて下さい。」という指示のもと、「是非希望する」～「全くその必要はない」の7段階で評定させた。

II. 1998年5月の第2週から第3週

手続きIの一週間後、

- ・性格検査⑤の結果のフィードバック
 - ・質問紙④「認知的適合感尺度」（そのフィードバックに対する認知的適合感を問うため）
- を実施した。

現実自己像とYG性格検査の結果が異なる特性（一人1特性）についてYG性格検査の結果をフィードバックする群と、現実自己像とYG性格検査の結果が一致している特性（一人1特性）についてフィードバックする群をもうけた。ただし、YG性格検査の12特性のうち、「現実自己認知尺度」の自己評価得点とYG性格検査の評価得点が正反対になっている項目がある者を、異なる特性をフィードバックする群（以後、「異フィードバック群」とする）とした。また、自己評価得点とYG性格検査の評価得点が全く同じになっている項目がある者を一致している特性をフィードバックする群（以後、「同フィードバック群」とする）とした。

それぞれフィードバックを行ったあと、それに対する認知的適合感について質問紙④「認知的適合感尺度」を実施した。

⑤「認知的適合感尺度」は、「今回の性格検査の結果に関して、あなた自身、どのくらい『当たっている』と感じられましたか？次の、『1. 全く当たっていない』から『6. かなり当たっている』のうち、あてはまるもの一つに○をつけてください。」という指示のもと、6段階で評定させるものであった。

Table 1. 自己認識欲求高群・低群、公的・私的自己意識群、および信頼性高群・低群の被験者数

	自己認識欲求・高群			自己認識欲求・低群		
	信頼性・高群	信頼性・低群	計	信頼性・高群	信頼性・低群	計
公的自己意識	12	20	32	15	12	27
私的自己意識	15	14	29	13	16	29
計	27	34	61	28	28	56

仮説3を検討するために、性格検査③を信頼度のあ
るYG性格検査であると教示する群とそうでない群を
もうける必要があったので、これら研究Iの全調査は
数グループに分けて実施した。

結果と考察

本研究では、被験者を、質問紙②「相互依存-独立
的自己理解尺度」の得点の高低により公的自己意識群
と私的自己意識群に、質問紙③のYG性格検査の信頼
度を強調したか否かで信頼度高群と低群に、質問紙④
「自己認識欲求尺度」の得点の高低により自己認識欲
求高群と低群に分けた。

ただし自己認識欲求高・低群については、「是非希
望する」から「全くその必要はない」まで7件法で回
答させたものをそれぞれ7点から1点まで得点化した
ところ、その評定の平均は6.25(SD=1.04)とかなり高
く、7点の者も117人中61人と、約半数を占めてい
たため、評定値が7点の者を自己認識欲求高群、6点
以下の者を低群とした。

また、公的・私的自己意識に関しては、「かなりあ
てはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法
で評定させたものを5点から1点に得点化したところ、
被験者全体における全項目の平均得点は4.17点
(SD=0.60)であり、うち平均得点が4.19点以下の者
を公的自己意識群(X=3.67, SD=0.47)、4.24点以上の
者を私的自己意識群(X=4.63, SD=0.35)とし、すべて
の被験者が公的自己意識群あるいは私的自己意識群の
いずれかになるようにした。被験者の内訳はTable 1
の通りである。

また、認知的適合感について、1～6点に得点化
したところ、被験者全体の認知的適合感の平均得点は
3.99点(SD=1.23)であった。自己認識欲求各群、公的・
私的自己意識各群、信頼度の高低各群における認知的
適合感の平均と標準偏差はTable 2～4の通りである。

Table 2～4に示されるように、自己認識欲求の高
群・低群、公的・私的自己意識群、信頼度高群・低群
のすべての群においてフィードバックへの認知的適合
感の平均は3(「どちらかという当たっていない」)
を上回っていた。また、自己認識欲求高群・公的・
私的自己意識群・信頼度高群はその平均が4(「ど
ちらかという当たっている」)を上回っていた。この結
果から、自己認識欲求高群・公的・私的自己意識群・
信頼度高群は「当たっている」と感じた者が多かった
といえる。

また、「どちらかといえば当たっている」「当たって

Table 2. 自己認識欲求高群と低群における
認知的適合感の平均と標準偏差

	高群	低群
\bar{X}	4.57	3.36
SD	1.04	1.10
N	61	56

Table 3. 公的・私的自己意識各群の
認知的適合感の平均と標準偏差

	公的自己意識群	私的自己意識群
\bar{X}	4.00	3.98
SD	1.27	1.19
N	59	58

Table 4. 信頼性高・低各群の認知的適合感の
平均と標準偏差

	高群	低群
\bar{X}	3.76	4.25
SD	1.15	1.27
N	62	55

いる」「かなり当たっている」という「当たっている」
傾向を回答したものは被験者全体では71%、異フィ
ードバック群では72%、同フィードバック群では69
%、とすべての群においてほぼ7割の者がフィードバ
ック結果に認知的適合感を感じていた。

「当たっている」傾向を示した者は自己認識欲求高群
では89%・低群では52%、信頼度高群では69%・低
群では73%、私的自己意識群では73%・公的・私的
自己意識群では69%であった。したがって、信頼度高
群・低群、私的・公的・私的自己意識群では、およそ
7割の者が認知的適合感を感じていることがわかる。
また、自己認識欲求高群では、およそ9割の者が認
知的適合感を感じている傍ら、自己認識欲求低群では
約半数の者しか認知的適合感を感じていなかったとい
うことがわかる。

Table 2～4における各群の認知的適合感の平均は
現実自己像とYG性格検査の結果が異なる特性をフィ
ードバックされた群(以後、「異フィードバック群」
とする)と、現実自己像とYG性格検査の結果が一
致している特性フィードバックされた群(以後、「同
フィードバック群」とする)の双方をあわせた結果で
ある。そこで、異フィードバック群と同フィードバ
ック群それぞれの認知的適合感における平均をとった
のがTable 5～7である。

Table 5～7に示されるように、フィードバックへ

Table 5. 自己認識欲求高・低各群の異・同フィードバックにおける認知的適合感の平均

	異フィードバック	同フィードバック
自己認識欲求 高群	4.38	4.81
自己認識欲求 低群	3.29	3.43

Table 6. 公的・私的自己意識各群の異同フィードバックにおける認知的適合感の平均

	異フィードバック	同フィードバック
公的自己意識	3.61	4.43
私的自己意識	4.16	3.78

Table 7. 信頼度高・低各群の異同フィードバックにおける認知的適合感の平均

	異フィードバック	同フィードバック
信頼性高群	4.03	4.50
信頼性低群	3.76	3.76

の認知的適合感の平均は、自己認識欲求低群を除く全ての群で、中点の3.5を上回っていた(3は「どちらか」といって当たっていない、4は「どちらか」といって当たっている)。そして、自己認識欲求高群では、同フィードバック群、異フィードバック群ともに、公的自己意識群では、同フィードバック群が、また、信頼度に関しては信頼度高群において同フィードバック群、異フィードバック群ともに、認知的適合感の平均が4を上回っていた。

さらに、各群における、人格特性のフィードバックに対する認知的適合感の平均について群間でt検定を行ったところ、自己認識欲求高群と低群における認知的適合感の平均は高群が有意に高かった($t=6.09$, $df=115$, $p<.01$)。また、信頼度高群と低群についても認知的適合感の平均は高群が有意に高かった($t=2.20$, $df=115$, $p<.05$)。

したがって、仮説1、仮説3は支持された。すなわち、他者による人格特性の評価が自分の思っていた結果と異なったものであっても、自己について知りたいという欲求である自己認識欲求の強い者は弱い者に比べて、他者による自己に関する人格特性の評価に対して、より「当たっている」と感じる認知的適合感が高く、また、その他者による自己の人格特性に対する評価が信頼できるものである方が、「当たっている」という認知的適合感は高くなるということがいえた。しかし、公的自己意識群と私的自己意識群における、認知的適合感の平均に差はみられなかった。

— 研究Ⅱ —

他者による評価に関する記憶は、一定期間経た後も持続し、現実自己像に影響を与えるのだろうか。

他者による評価を受けてから一定期間後の記憶および現実自己像を測定し、自己認識欲求、公的・私的自己意識、評価に対する信頼度という要因がフィードバ

ックに関する記憶に与える影響、また、フィードバックが後の自己像に与える影響について以下の仮説を検討する。

仮説1：自己認識欲求の強い者は弱い者に比べ、他者による自己の人格特性の評価に対する記憶は持続しているだろう

仮説2：公的自己意識の強い者は私的自己意識の強い者に比べ、他者による自己の人格特性の評価に対する記憶は持続しているだろう

仮説3：信頼度が高いフィードバックを受けた者は信頼度が低いフィードバックを受けた者よりも、他者による自己の人格特性の評価に対する記憶は持続するだろう。

仮説4：元来自分がとらえていた自己像と異なる自己像をフィードバックされた場合、そのフィードバックが後の自己像に何らかの影響を与えるだろう。

方法

被験者：研究Ⅰに参加した和歌山大学学生117名(男子62名・女子55名)

手続き：研究Ⅰ実施の4週間後(1998年6月の第1週から第2週にかけて)、研究Ⅰで設けた自己認識欲求各群、公的・私的自己意識各群、信頼度各群に対し、上記の質問紙④「現実自己認知尺度」および「フィードバック結果記憶度テスト」を順に集団で実施した。質問紙④「現実自己認知尺度」は、研究Ⅰで用いた質問紙①「現実自己認知尺度」とその内容および教示方法等に関して全く同様であった。

「フィードバック結果記憶度テスト」は、研究Ⅰでフィードバックされた特性項目とその特性程度を再認の形で尋ねたものである。「前回お返しした性格検査の結果について、どのような特性について言及されていたか、次の①～⑩までの当てはまるところに○を付け、その際、その傾向がどのくらい強いといわれたか当てはまるところに、さらに○をつけてください。」という教示のもと、「①抑鬱的である」から「⑩社会的に内向的である」までのYG性格検査で測定する性格特性を列挙し、当てはまる特性1点を選ばせた。また、その特性の程度を「かなりその傾向が強い」「どちらかといえばその傾向が強い」「普通」「どちらかといえばその傾向が弱い」「かなりその傾向が弱い」の5段階で評定させた。

結果と考察

(1) 自己認識欲求と人格特性への記憶

自己認識欲求各群の、フィードバックに関する記憶度の差をみるため、フィードバックの記憶度の平均と標準偏差を求め比較した(Table 8)。ちなみにフィードバックの記憶度とは、「フィードバック結果記憶度テスト」の「かなりその傾向が強い」から「かな

Table 8. 自己認識欲求高・低各群の記憶度の差の平均と標準偏差

	高群	低群
\bar{X}	0.44	0.18
SD	1.25	1.45
N	50	46

Table 9. 公的・私的自己意識各群の記憶度の差の平均と標準偏差

	公的自己意識群	私的自己意識群
\bar{X}	0.13	0.50
SD	1.31	4.37
N	48	46

Table 10. 信頼度高・低各群の記憶度の差の平均と標準偏差

	信頼性高群	信頼性低群
\bar{X}	0.41	0.20
SD	1.45	1.20
N	54	40

りその傾向が弱い」までをそれぞれ1～5点に得点化し、同様に、実際に行ったフィードバックにおける「かなりその傾向が強い」から「かなりその傾向が弱い」までをそれぞれ1～5点に得点化したものとの差の絶対値をとったもので、被験者全体では平均2.79(SD=1.57)であった。

自己認識欲求高群と低群の、フィードバックの記憶度の平均には、t検定の結果、有意な差はみられず、仮説1は支持されない結果となり、自己認識欲求の強い者は弱い者より、フィードバックに関する記憶が持続しているとはいえなかった。

(2) 公的・私的自己意識と人格特性への記憶

公的・私的自己意識各群の、フィードバックの記憶度の平均と標準偏差はそれぞれTable 9の通りであった。

公的・私的自己意識両群の間で、フィードバックの記憶度の平均には、t検定の結果、有意な差はみられず、仮説2は支持されない結果となり、公的自己意識の強い者は私的自己意識の強い者より、フィードバックに関する記憶が持続しているとはいえなかった。

(3) 信頼度の高低と人格特性への記憶

信頼度高群・低群の、フィードバックの記憶度の平均と標準偏差はそれぞれTable 10の通りであった。

フィードバックの記憶度の平均には、t検定の結果、信頼度両群の間に、有意な差はみられず、仮説3は支持されない結果となり、信頼度が高いフィードバックを受けた者は信頼度が低いフィードバックを受けた者よりも、他者による自己の人格特性の評価に対する記憶は持続しているとはいえなかった。

(4) 人格特性のフィードバックが後の自己概念に与える影響

自己が認知している自己特性と異なるフィードバック

Table 11. 非フィードバック特性と比較したフィードバック特性の現実自己認知尺度得点1回目と2回目の相関

特性	相関(r)	比較特性	相関(r)
5	.05	7	.61 **
6	-.06	7	.66 **
9	.38 **	7	.42 **
1	.56 **	7	.63 **
8	.78 **	7	.75 **
10	.90 **	7	.63 **
12	.89 **	7	.82 **
5	.05	11	.61 **
6	-.06	11	.57 **
9	.38 **	11	.84 **
1	.56 **	11	.59 **
8	.78 **	11	.54 **
10	.90 **	11	.78 **
12	.89 **	11	.37 **
5	.05	2	.76 **
6	-.06	2	.65 **
9	.38 **	2	.48 **
1	.56 **	2	.64 **
8	.78 **	2	.61 **
10	.90 **	2	.36 **
12	.89 **	2	.75 **
5	.05	3	.85 **
6	-.06	3	.39 **
9	.38 **	3	.79 **
1	.56 **	3	.58 **
8	.78 **	3	.76 **
10	.90 **	3	.77 **
12	.89 **	3	.75 **
5	.05	4	.85 **
6	-.06	4	.68 **
9	.38 **	4	.83 **
1	.56 **	4	.59 **
8	.78 **	4	.79 **
10	.90 **	4	.92 **
12	.89 **	4	.68 **

** p<.01

Table 12. フィードバック特性におけるフィードバック群・非フィードバック群別現実自己認知尺度得点1回目と2回目の相関

	フィードバック群	非フィードバック群
異フィードバック特性	5	.38 **
	6	.72 **
	9	.52 **
同フィードバック特性	1	.73 **
	8	.78 **
	10	.54 **
	12	.65 **

** p<.01

クを受けることが後の自己概念に与える影響を調べるために、1回目と2回目の現実自己認知尺度得点の相関を、フィードバックされた項目とされなかった項目に関して比較した。結果はTable 11の通りである。

特性番号5「客観的である」、6「協調性がある」、

Table 13. 特性5をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	5	6	9	8	1	12	10	7	11	2	3	4
\bar{X}	1.33	0.39	0.72	0.56	0.50	0.89	0.89	0.83	0.44	0.67	0.44	0.50
SD	1.19	0.61	0.67	0.70	0.71	0.83	0.83	0.92	0.92	0.77	0.62	0.79
相関 (r)	.05	.85	.54	.77	.81	.54	.49	.61	.61	.76	.85	.85

Table 14. 特性6をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	6	5	9	8	1	12	10	7	11	2	3	4
\bar{X}	1.08	0.67	0.67	0.42	0.75	0.42	0.75	0.58	0.58	0.63	0.67	0.58
SD	1.18	0.87	0.92	0.58	0.90	0.58	1.03	0.83	0.83	0.71	0.87	0.72
相関 (r)	-.06	.29	.33	.82	.47	.75	-.01	.66	.66	.65	.39	.68

Table 15. 特性9をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	9	5	6	8	1	12	10	7	11	2	3	4
\bar{X}	1.11	0.56	0.67	0.56	0.78	0.78	0.33	0.94	0.50	0.61	0.50	0.44
SD	1.02	0.70	0.69	0.78	0.81	0.55	0.69	1.16	0.62	1.09	0.71	0.62
相関 (r)	.38	.43	.60	.69	.60	.69	.83	.42	.84	.48	.79	.83

Table 16. 特性1をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	1	5	6	9	8	12	10	7	11	2	3	4
\bar{X}	0.83	0.67	0.50	0.33	0.58	0.83	0.92	0.75	0.92	0.67	1.00	0.83
SD	1.27	0.98	0.67	0.49	0.51	0.83	1.00	0.87	0.76	0.98	0.95	1.03
相関 (r)	.56	.38	.78	.64	.78	.55	.44	.63	.59	.64	.58	.59

Table 17. 特性8をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	8	5	6	9	1	12	10	7	11	2	3	4
\bar{X}	0.42	0.79	0.47	0.58	0.47	0.79	0.47	0.58	0.63	0.58	0.63	0.58
SD	0.51	0.79	0.77	0.61	0.61	0.63	0.61	0.61	0.60	0.90	0.68	0.77
相関 (r)	.78	.50	.67	.75	.84	.69	.79	.75	.54	.61	.76	.79

Table 18. 特性10をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	10	5	6	9	8	1	12	7	11	2	3	4
\bar{X}	0.67	1.17	0.50	0.50	0.33	0.50	0.50	0.67	0.50	0.67	0.50	0.50
SD	0.52	0.98	0.55	0.55	0.52	0.55	0.84	0.52	0.55	0.82	0.55	0.55
相関 (r)	.90	.35	.76	.64	.89	.89	.87	.63	.78	.36	.77	.92

Table 19. 特性12をフィードバックした被験者の自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と相関

特性	12	5	6	9	8	1	10	7	11	2	3	4
\bar{X}	0.18	0.41	0.35	0.71	0.41	0.24	0.47	0.35	0.76	0.71	0.53	0.53
SD	0.39	0.62	0.49	0.77	0.62	0.44	0.87	0.49	0.56	0.85	0.62	0.72
相関 (r)	.89	.67	.73	.38	.60	.92	.49	.82	.37	.75	.75	.68

9「のんきである」は異フィードバック群に対してフィードバックした特性で、特性番号1「抑鬱的である」、8「活動的である」、10「思考が内向的である」、12「社会的に内向的である」は同フィードバック群に対してフィードバックした特性である。また、特性番号2「気分の変化が激しい」、3「劣等感が強い」、4「神経質である」、7「攻撃的である」、11「支配的である」はどの被験者のフィードバックにも用いられなかった、統制の役割をもつ特性である。なお、YG性格検査の結果と現実自己像が逆になっているものをフィードバックする特性、YG性格検査の結果と現実自己像が一致したものをフィードバックする特性、フィードバックに用いない特性が、それぞれ4特性、3特性、5特

性である理由は、同フィードバック群、異フィードバック群を、全被験者の約半数ずつにする事を意図したものの、それぞれの群の人数をカバーする項目が、一致している特性では4特性、反対の結果になっている特性では3特性にわたったためである。

1回目と2回目の現実自己認知尺度得点の相関を比較した結果、特性番号6と5以外の全ての特性において、1回目と2回目の相関は1%水準で有意に高かった。しかし、異フィードバックである、特性番号5, 6, 9, のうち、特性5と特性6の相関は低かった。

このことから、異フィードバックをうけた者の多くが、はじめに評定した自己像とフィードバック後に評定した自己像が一致していなかったといえるため、他

者による評価が後の自己像に影響を与えていると考えることができる。

しかし、今回のこの比較は、同じ被験者のデータを項目間で比較したものであるため、項目の特性内容が何らかの影響を与えている可能性も考えられる。そこで、同じ項目について、異フィードバック群と同フィードバック群のそれぞれ1回目と2回目の自己認知尺度得点の相関（ピアソンの相関）を取り、比較した。その結果を Table 12 に示す。

項目番号5, 6, 9以外の全ての項目において、1試行目と2試行目の相関は1%水準で有意に高かった。しかし、異フィードバックである、項目番号5, 6, 9の相関は低かった。

このことから、Table 8の結果と同様に、他者による評価が後の自己像に影響を与えていると考えることができ、さらに、項目の特性内容が何らかの影響を与えているという可能性も否定された。

これらの結果から、他者による評価を受けた際、それが自己像と同じものではなくても、後の自己像を変化させており、さらにそれが、一定期間を経た後の自己像に影響し、変化を与えているということがいえ、仮説4は支持された。

また、フィードバックを行った7特性について、それぞれ、フィードバックを行った被験者の、フィードバックした特性としていない特性の、自己認知尺度1回目と2回目の差の平均と標準偏差、および相関をもとめた。その結果は、Table 13～19の通りである。

2回の差の平均についてt検定を行ったところ、特性5, 6, 9に有意差がみられた。有意差がみられた特性は、特性12をのぞいて、すべて異フィードバック特性であった。この特性5, 6, 9の有意差は、フィードバックをしていない特性に比べ、自己認知尺度の1回目と2回目の差の平均が有意に大きいことを示すものであったのに対し、同フィードバック特性である特性12の有意差は、差の平均が有意に小さいことを示すものであった。

したがって、自己認知尺度の1回目と2回目の差の平均が有意に大きいことを示したのは、異フィードバック特性5, 6, 9のみであり、このことは、自己認知尺度を1回目実施した際の自己像と異なるフィードバックを受けた者は、自己像と同じフィードバックを受けた者より、後の自己像の評定を変化させていると考えられる。

おわりに

自己認識欲求の高低、公的・私的自己意識、信頼性の高低それぞれの群における認知的適合感の平均をとった結果、どちらのフィードバックを受けた群もその内容に認知的適合感を感じている傾向があった。これ

は、故意に誤ったフィードバックをされた者の多くに、実際には存在しない自己の特性に対する、他者による指摘に黙従する傾向がみられたということであり、少なくとも他者から人格特性に関する評価を受けた直後は、実際とは異なる人格特性を自分も持っていると思ひこむということである。さらにこのことは、他者から与えられる言葉や様々なシンボル等無批判的に受け入れることにより、その人の自己評価や行動などが変容されるといった影響があることを予想させる結果であった。

自己認識欲求の高い者が、より有意に他者による評価に認知的適合感を感じるということに関して、自己を知りたいという欲求である「自己認識欲求」が高ければ高いほど自己情報収集欲求が高いため、それが低い者より他者からの自己情報にも強い関心を示し、他者による自己への言及を比較的受け入れやすい可能性を示唆している。

また、フィードバックへの信頼度が高ければ高いほど、他者による評価に認知的適合感を感じるということに関しては、結果への関心が強く、評価の正しさを信じている者ほど、フィードバックされたものを受け入れやすい、つまり、他者によってフィードバックされた自己への評価に認知的適合感を感じやすいのではないかと考えられる。

一方、研究Iのもう一つの仮説でもあった公的自己意識・私的自己意識の違いが、他者による評価に対する認知的適合感という面に何ら影響をもたらさなかったという結果について、本来であれば公的自己意識群・私的自己意識群をもうける際、相互依存-独立的自己理解尺度得点における上位・下位の何パーセントかを抽出して、それぞれ公的自己意識群・私的自己意識群とすべきであるが、本研究では、もともとの被験者数が充分でなかったため、研究に参加した全被験者の、相互依存-独立的自己理解尺度得点の上位約50%を公的自己意識群、下位約50%を私的自己意識群とした。そのため、公的自己意識・私的自己意識のボーダー上にある、いわゆるどちらの特徴も強くない被験者も多数含まれており、公的自己意識群と私的自己意識群の間に大きな自己意識の持ち方の差がみられなかった可能性があると考えられる。

また、研究IIの結果から、もともと持っていた自己像と異なる自己像を他者からフィードバックされた者は、一定期間経た後の自己像がより変化しているということがいえ、何らかの影響を長期的に受け続けているのではないかとということが示唆された。

本研究で、明らかになった事が事実であれば、人は他者による評価が自分自身が抱いていたものでなくてもそれに影響を受けている可能性が考えられる。しかも長期的に、である。

実際、保護観察少年の社会復帰援助に関するボラン

ティア活動などを通して、時に他者による性格特性等に対する言及が、少年の自己像形成において大きな影響を与えているのではないかと、という疑問を持つことがあった。日常生活に不適応を感じている者ほど自己認識欲求が高いという上瀬(1992)の研究と、自己認識欲求の高い者ほど他者から受ける人格に関するフィードバックに黙従する傾向があるという本研究を併せて考えると、社会や学校に不適応を感じている者が他者からの評価に影響を受け易いことが危惧される。殊に、少年期や青年期においては、不安定であるうえに、アイデンティティーの獲得の時期であると思われるため、この時期の者に対する評価を行う際には慎重を期す必要があるといえる。

さらに、他者による評価が信頼性の高いものであればあるほど、その評価に黙従する傾向があったことから、例えば、青少年であれば、親や教師等の、青少年にとって信頼性のある立場にあるものは、自らのフィードバックが彼らにより一層の影響を与える可能性を自覚して指導に臨むべきだと思われる。

ロジャースの理論をみても、自己に対する「実感」と自己概念の間に生じる不一致が心理的困難を引き起こす可能性が考えられる。非行、不登校を初めとする、若者のさまざまな問題行動がこの不一致により引き起こされないためにも、彼らを実評価する際には、より一層の注意を払うことが大切であろう。

引用文献

- Becker, H.S. 1964 Personal change in adult life. *Sociometry*, **27**, 40-53.
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己心理学研究, **63**, 214-217.
- 遠藤由美 1993 自他認知における理想自己の効果心理学研究, **64**, 271-278.
- 池見 陽 1995 心のメッセージを聴く—実感が語る心理学— 講談社現代新書
- 上瀬由美子 1992 自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子青年を対象として— 心理学研究, **63**, 30-37.
- 上瀬由美子・堀野緑 1995 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景—青年期を対象として— 教育心理学研究, **43**, 23-31.
- 菊池 聡・青木知史 1994 現代大学生の超常現象や占いに対する興味・関心に関する研究(1) —人格変数との関連の検討— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 266.
- Kokenes, B, 1979 Grade level differences in factors of self-esteem. *Developmental Psychology*, **10**, 954-958
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較—日本人大学生にみられる特徴— 教育心理学研究, **41**, 339-348.
- 浮谷秀一 1994 Implicit personality test explicit personality test についての研究 日本大学心理学研究, **15**, 37-49.